

一座の花形で古今無比の美音家、男性的な此竹本座の調和の上になくはならない竹本采女が、とう／＼退座をしたいと云つて出た興行上の成績がおもしろくなく、況んや自分の藝に強い自信が出来てゐる采女は、もう一日も辛抱がしてゐられない、今この時とばかり断然決意を示した。義太夫とて是れを聞いて多少は苦い顔をしたであらうが、強いてこれを引き止める勇氣はない。義太夫とてその昔、宇治加賀の一座にあつて、京の見物に非常な人氣を博してゐながら、自己の信念の上から断然退座をしたことがある、そればかりでなく加賀掾との對抗興行もつい此間のことだ、さう得手勝手は云はれないわけである。義太夫は采女に退座を許してやつた。許してやつたのはいゝが、これが爲めに竹本座は一層の悲境である、内憂外患交々至るで、如何なる鐵石心もかう傷めつけられてはたまらな

30
さて窮境のドン底にある竹本座を見捨て、出て行つてしまつた采女はどうなるかといふとこれが果して同じ道頓堀の東立慶町の芝居で、道具屋吉左衛門、永嶋重太夫、などといふ連中と一座して、素淨瑠璃を始めたが、もとより永續きはしないで、すぐ中止してしまひ、その後もう一度準備を豊富にして、陣容を立て直して、自身も豊竹若太夫といふ名に改めて、櫓幕にも堂々と豊竹座と記して打つて出た。いふまでもなく天稟の美聲を以て竹本座の豪音義太夫に對抗挑戦する爲めである。この豊竹座とは今の辨天座のあたりである。道頓堀の東西には、かうして二つの『操り芝居』の櫓が對立することになつたのである。

若太夫は後に越前少掾を授けられた。大阪南船場の富豪の子、霸氣に富んだ敏慧の人。

義太夫は、天王寺村の百姓の子、純情眞摯の人、おもしろい對象ではないか。

曾根崎心中上演

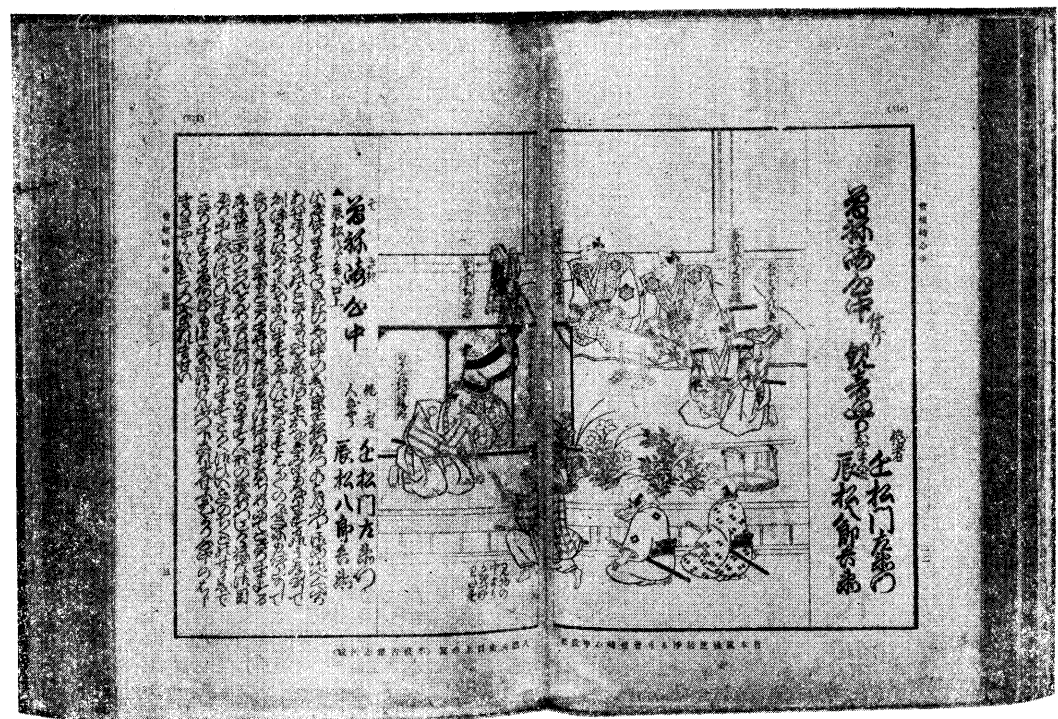
新しい現代語の試み

義太夫の方も、かういつまで傷めつけられ、叩きのめされてゐては、實際どうにもかうにもならない、ところが天の助けといはうか加佛の護か、困りきつた義太夫の頭の上へ一道の光明がサツと耀いた。弘誓の船はその岸まで漕ぎつけられたのである。義太夫の喜び譬ふるものがない。救ひの神様とはいつたい誰れだ、近松門左衛門その人である。

元祿十四年四月頃のことだつた。

近松門左衛門は京都から、ひよつこりと大阪にやつて来た。いつもは京の歌舞伎阪田藤十郎の爲めに狂言を書いてゐて、あまり大阪へ下つたことはなかつたが、来て見ればこれはどうだ、お互ひに藝術上の友達だと思つてゐる竹本義太夫が此ごろの困りやう。竹本座の甚しい悲境、どうも目を開いては見えてゐられなかつた。近松は深くも決心し、老友救はざるべからず、と直ちに筆をふるつて、乾坤*

それは深い譯があつての事である。その理由を調べて見ると、大入大盛況が當然の報酬であつた事が肯かれるのである。かうなると、義



曾根崎心中の圖

* 一擲の新作、始めての世話浄瑠璃『曾根崎心中』を書き出したやがて此狂言が出来あがると、その翌五月直ちに竹本座へ上演した『西京近松門左衛門、あとの月、ふつと當地へ下り合せましたかやうのこと御座りましたを承はり、何とぞ、おなぐさみにもなりますやうにと存じまして、即ち淨瑠璃に取組みお目にかけます』

かういふ口上書が出たところを見ると、たいへんな意氣込みで開けてかゝつたものと見へる。ところがどうだ果して未曾有の大入満員而かも大變な好評で、桃栗三年柿八年どころでない十八年目に始めて見る大收獲であつた。

と云つてしまつてはなんの變哲もない、『曾根崎心中』がこんな大當りを取ることの出来たのには

太夫の爲めに從來とて幾つも脚本を提供してゐる近松が、どうして今度に限つて救ひの神になり、その作『曾根崎心中』が、さう大した人氣を集めたかと云はれるかも知れないが、その時代としては、殆んど天と地の相違、冒險的大革新を此作は敢てしてゐるのである。

これまでの淨瑠璃は、多くは、荒唐無稽な傳奇的語り物に過ぎなくて、扱はれてゐる人物なども、殿上人や武家の階級、素盞鳴尊、弘法大師、道眞、蟬丸、朝比奈、義經、正行、常磐御前、などと凡そは歴史の上の人物で、あまりに竹本座を聴きに行く見物達の生活とはかけ離れすぎてゐる。だから美しい押畫を見てゐる觀念は起つても、ぴつたりと直接胸に響いてくるものがない。それ故なんとなく物足らない。そこへ今度はどうだ、現在自分等の生活と其儘の町人の徳兵衛やお初が現はれて来て、現在のまゝの生玉や曾根崎が舞臺化されてゐるのではないか、見物の喜んだのも無理はない、而かも作者近松の大膽な試みはなほこれに止まらない、これまでは殆ど唄ひ物のやうな言葉づかひをしてゐた淨瑠璃に、その作には、當時普通に使はれて居た現代語を用ひ、直接簡明に見物の心に觸れやうとし、出てくる茶店の主人、内儀、手代、丁稚に至るまで、どれもこれも盡くすぐ呑み込める人物ばかりである。

なんとこれが驚異でなくてなんであらう。近松にして始めて出来る離れ業である。而かもなほ近松一流の名文によつて、生玉社前で亂打された徳兵衛が通行の群集に向つて辯明をするあたり、或はお初が心中の決心をして天満屋を脱けて出る夜中の光景、道行の寫生の文章、曾根崎の森の情死の光景。など、殆ど見物の心を恍惚たらしめたに相違ない。

さて又此作を得て、これまで時代物の淨瑠璃ばかりを語つてゐて、とても突飛な改革を企てた此作に接した義太夫が果してなんと思つたか、見も知らぬ世界へ乗り出すのと同じ冒險を敢てせなければ語ることの出来ないこの新しい作に對して彼はどんな態度をとつたか、五十三歳の老藝術家、如何に義太夫節大成の祈願をもつて生涯としてゐるにしても、これには驚いたであらうと思はれるが、ところが彼はなんの躊躇もなく、これを採つたばかりか、大に喜んで日夜この作の研究に努力して、なんでもかんでも成功せねばならないと、なみ／＼ならぬ苦心をしてゐる、それもその筈で内容の上に大變な改革があるのだから、永い間の經驗も多くはそのまゝ此作の上に役立てるわけにはゆかない、大に新工夫を練らねば完成は出来ないのだから厄介だ。だが幸ひにもその結果は酬はれてかうして成功したのでから、義太夫にとつても、新しい藝の道が一筋拓けたわけである。また此座のおやま使ひ辰松八郎兵衛も、女主人公のお初を使つて思ふ存分に活躍した。三十三番觀音巡りの道行は甚だ長丁場であるが、非常な歡迎を見物から受けたのであつた。

それから、こんな大膽不敵な新しい作を創めた近松門左衛門のことに移るが、これがまた、かうした新しい傾向に趨つたについては

一朝一夕のことではない、永い間の彼れの作者生活が、こゝに端なくも、一の更新を起す轉機に際してゐたのであつた。近松は從來京都に住んでゐて、歌舞伎作者として、主に都萬太夫座、早雲長太夫座の芝居に出勤してゐる當代の名優阪田藤十郎や、大和屋甚兵衛、中村四郎五郎、生嶋新五郎一座の爲めに絶へず狂言を書いてゐて、その間に淨瑠璃の作も書いてゐたが、多く京都に住んでゐた理由は、阪田藤十郎があつた爲めである。近松と藤十郎とはお互ひの藝術上の立場を信じ合つて、よほどよく理解し合つてゐたといふことは、いくつも例證があるほどで、殆んど親友以上の交はりをしてゐたのである。ところが元祿の末年になつて、阪田藤十郎は、とる年と共に、次第に舞臺上の生命も衰へて、もうとても以前の花々しい儂が無く、引退をするのも、近くだといふやうな心細いことになつて來た。近松は云ふべからざる寂しい思ひをしたのである。たつた一人此世で己が藝術を理解してくれた俳優がかういふ有様では、とても他の俳優に作を書いて見る勇氣がない、さうはいふものゝ、藤十郎は衰へたが、自身はまだ／＼藝術上の慾念に燃へてゐるのだ。如何に慾念は燃へてゐても、困つたことには、どちらをふり返つても、役者本位の脚本や、舞臺本位の脚本、千遍一律何んの變化もない狂言で満足してゐる現状では、とても自分の思ふがまゝの作を書けるわけがない。もう京都も藤十郎が引退してしまつてはおしまひだ、とかう腹のうちに思つてゐた。かういふ時に彼れはひよつこりと大阪に現はれた、これは自分で勝手に出掛けたのか、或ひは義太夫が呼び寄せたのかその邊は確かでないが、近松が藝術的に何か不満で、新しい境地を發見しやうとして頭を悩ましてゐる時であつたに相違ない。折も折かういふ處へ知り合ひである義太夫の悲運が目に入つたのだ。彼れは蹶然として己が抱負を實現すべく、筆を採つたのである。一氣呵成、短時日の作とは云ひながら、彼が熱意をこめて書き上げたこの狂言が、人を動かすことの出來ぬ筈はない、果せるかな『曾根崎心中』は滿都の好評を博した。近松が京都を引拂つて大阪へ移つたのは多く此時に動機を發してゐることは疑ひのないことである。

こゝに此『曾根崎心中』の好評が、事實どれほどの影響を後の斯界に與へたかといふと、同じ年の七月に、竹本座の敵であるところの豊竹座で、紀海音の作と稱する『さかひみやげ、心中涙の玉の井』を座頭の若太夫が語つてゐる事實を見ると、すぐ想像がつく、而かも心中の娘の名まで同じやうにお初を眞似てゐる。（此狂言は前年堺で興行したものゝ改作である）それから其翌年、寶永元年五月には、本家の竹本座の方で、もう一度曾根崎心中を思ひ出して、その一週忌といふので『曾根崎心中後日、遊女誠草』といふのを上場してゐるが、作者は不明である。この他、淨瑠璃に歌舞伎に、澤山な類作が生れてゐて、一々枚擧に違がない。